

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：13904

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02253

研究課題名(和文) 現代フランス哲学の宗教的背景の解明に向けて：カヴァイエスの数理哲学と宗教思想

研究課題名(英文) For elucidation of some religious backgrounds of the contemporary French philosophy: relations between the mathematical philosophy and the religious thought in Jean Cavailles' work

研究代表者

中村 大介 (NAKAMURA, Daisuke)

豊橋技術科学大学・総合教育院・准教授

研究者番号：70726611

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ジャン・カヴァイエス(1903-1944)の数理哲学と宗教思想の関係を究明し、以下の成果を得た。

(1) 大戦間のドイツ青年運動に対して、彼は「青年自ら自律性の要求を求める」点で積極的な評価を下している。(2) 青年運動の自律性は「断絶しては再開する」点に特徴があるが、彼はナチス政権下のドイツ福音主義教会の運動の内に、青年運動からの断絶と再開を見出している。(3) そしてこの断絶と再開はまた数学の自律性の特徴でもあるというのが彼の見解である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「成果の概要」で述べたように、青年運動の断絶と再開と数学の進展における断絶と再開に類比的な自律性がある、というカヴァイエスの主張が明らかになった。これは科学や数学の進展と宗教運動に共通するリズムがあるという、興味深い帰結を含んでいる。

また彼は第二次世界大戦中にレジスタンス活動に加わるのだが、この活動自体を青年運動からの「断絶と再開」と解釈することも可能であり、宗教思想からレジスタンス活動へとカヴァイエス研究を今後広げるにあたり、重要な視点を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：I studied some relations between the mathematical philosophy and the religious thought in Jean Cavailles' work. Through this study, I obtained the following results. 1. He saw a positive side of the German youth movement in its requirement of autonomy of young people themselves. 2. This autonomy, which had contained break and resuming, was taken over by Evangelical Church in Germany. 3. Cavailles thinks that the same type of autonomy exists in the development of mathematics.

研究分野：エピステモロジー

キーワード：カヴァイエス プロテスタンティズム ドイツ青年運動 ドイツ福音主義教会 エピステモロジー 数理哲学 フランス哲学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究にとりかかるまで研究代表者・中村は、ジャン・カヴァイエス( Jean Cavailles, 1903-1944 )の数理哲学を主に研究していた。世界的にもカヴァイエスの研究といえば、数理哲学・科学哲学に軸足が置かれるのが普通であったが、彼はまたフランスでは少数派のプロテスタントの家系に育ち、独自の信仰をもっていた人でもあり、宗教思想に関する論文も多く残している。しかし、そうした論文に対する先行研究はきわめて少なく、数理哲学との関係を問うた研究についても同様であった。

### 2. 研究の目的

(1)上記のような背景を踏まえ、本研究課題は彼の宗教思想に目を転じ、カヴァイエスの数理哲学と宗教思想の関係性を明確にするべく構想された。この関係を問うことを通じて、カヴァイエスの思想に新たな全体像をもたらすことができれば、カヴァイエス研究に大きな進展をもたらすことができると思われる。

(2)カヴァイエスの哲学は戦後のフランス哲学(例えば構造主義など)に大きな影響を与えたことで知られる。本研究はそれゆえ、カヴァイエスにおける数理哲学と宗教思想の関連を解き明かすことを通じて、現代フランス哲学の宗教的背景に迫るというもう一つの目的も有している。

### 3. 研究の方法

(1)文献読解を主要な方法とした。第一に、カヴァイエスは高等師範学校時代に幾つかのキリスト教団体と関わりをもち、論文も発表している。これらの論文の読解を通して、彼の青年期の宗教的着想を明らかにした。

(2)第二に、カヴァイエスはドイツ留学(1930-1931年)後、ドイツにおける青年運動と宗教運動に関する論文を数本執筆している。これらを読解することで、留学を経て形成された彼の宗教思想の在り処を解明した。

\*なお、彼の父方および母方のプロテスタントの実相を明らかにするべく、カヴァイエスの手紙の読解も進める予定であったが、この点については不十分な仕方では研究を進めることができず、今後の課題となっている。

### 4. 研究成果

#### (1)「内的必然性」概念の重要性：高等師範学校時代の見解

カヴァイエスは論文「道徳教育とライシテ」(1928年)において、「生の生ける存在」である神という「絶対的なものと一致」に、永遠性が見出されると述べている。そしてその永遠性の内実は、「魂の生のリズムと永遠的生のリズムとの調和」にある。ではこの調和はどのように見出されるのか。彼が論文「プロテスタント青年とフランスにおけるプロテスタントの未来」(1925年)などで、「行動への衝動」によって行動と行動が連鎖していくような「内的必然性」が己のうちに見出される、と述べていることがこの問いへの手がかりとなる。

つまり、行動と行動をつなぐ「内的必然性」を覚知することが、魂のリズムと永遠的生のリズムの調和のしるしとして彼においては捉えられているのではないか、という推察が成り立つのである。

#### (2)ドイツ青年運動に見る「内的資源」：ドイツ青年運動・宗教運動研究その1

カヴァイエスはドイツ留学後、当地での研究成果を踏まえ、「ドイツにおける青年運動」(1931年)と題した論文を発表した。彼はそこで、「青年自身の自律性承認のための反抗」という「内的理由」から、青年運動に対して肯定的な評価を下している。また彼によれば、青年は己の本質に素朴に割り当てるものとしての「内的資源」という「永遠性」を備えているとされる。その「内的資源」とは(1)での見解を踏まえれば、ある行動から断絶しつつも別の行動を再開するという「内的必然性」を覚知して、神の永遠的生のリズムに参加することであると言えるだろう。

そして、青年運動のうちに見出された断絶と耐えざる再開を含む運動の自律性は、彼が数理哲学研究を通して、数学のうちに捉えた特徴でもある。かくして、彼が青年運動と数学の進展の双方に、あるアナログ的な自律的な様相を見て取っていることが明らかにされた。

なおカヴァイエスの同論文については、解題と詳細な訳注を伏した翻訳を紀要に掲載した。

#### (3)ドイツ福音主義教会の闘争：ドイツ青年運動・宗教運動研究その2

論文「ドイツ青年運動」で、カヴァイエスは青年運動に関してはその力は既に使い果たされたという診断を下している。しかしこの論文後、カヴァイエスは1932年から34年にかけて時事的な性格の強い論文を数本発表している。そしてこれらの論考からは、彼が青年運動からの「断絶と再開」を、ナチスドイツ政権下の福音主義教会の闘争のうちに取っていたことがうかがわれる。

その闘争は、ナチスと協働するプロテスタント内部のグループである「ドイツ的キリスト者」に対してなされた。とりわけニーマラーの「牧師緊急同盟」や「告白教会」がおこなった対抗運

動に彼は着目しており、その運動にカヴァイエスは青年運動から移された「内的資源」を見ているように思える。なおカール・バルトもまた、青年運動を受け継ぐ点で彼は評価しているが、「人間の行動」と「神の言葉」を厳しく峻別するバルトの着想には距離をとっており、カヴァイエスのバルトに対する評価は両義的と言える。

#### (4) 新たな研究への見通しとカヴァイエスの思想の全体像

以上の研究から、新たな研究に向けた仮説が研究代表者には浮かび上がってきた。カヴァイエスは第二次世界大戦中、対ナチス・レジスタンス活動で命をおとすことになるが、その活動自体、青年運動からの断絶でもあると共に、またその内的資源の継承でもあるドイツ福音主義教会の運動を、さらに自分なりに再開しようとしたものなのではないか、という仮説である。今後はこの仮説を念頭に研究を進めていきたい。

最後に、本研究から得られたカヴァイエスの思想の全体像をまとめておきたい。カヴァイエスは友人宛の書簡などで、自らの哲学を「合理主義」であると任じていた。それは第一に近代の合理主義を引き継ぎ、概念や観念、およびそれらの必然的連鎖には「神的なもの」があり、しかもそれらの認識は感覚経験を源泉としていないと主張する。しかしそれだけではない。それぞれの概念は操作や行動と不可分なものだという点に、概念における聖なるもの（神性）と俗なるもの（実践性）の等質性・両面性を主張するもう一つの合理主義が存在するのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

|   |                      |
|---|----------------------|
| 1. 著者名<br>中村大介                            | 4. 巻<br>41           |
| 2. 論文標題<br>ジャン・カヴァイエス「ドイツにおける青年運動」（翻訳と解題） | 5. 発行年<br>2019年      |
| 3. 雑誌名<br>雲雀野：総合教育院紀要                     | 6. 最初と最後の頁<br>78-102 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし             | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）     | 国際共著<br>-            |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>中村大介                                 |
| 2. 発表標題<br>抵抗するエピステモロジー の系譜 パシュラール、カヴァイエス、カンギレム |
| 3. 学会等名<br>日仏哲学会（提案型ワークショップ）                    |
| 4. 発表年<br>2017年                                 |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>中村大介   |
| 2. 発表標題<br>大戦間ドイツのプロテスタンティズムと青年運動に関するカヴァイエスの論考について 数理哲学との関係を視野に |
| 3. 学会等名<br>第1回エピステモロジー・ワークショップ                                  |
| 4. 発表年<br>2020年   |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究協力者 | 原田 雅樹<br><br>(harada masaki)<br><br>(90453357) | 関西学院大学・文学部・教授<br><br><br><br>(34504) |    |